

山と博物館

第45巻 第6号 2000年6月25日

市立大町山岳博物館



「ニリンソウ」上高地徳沢にて

撮影 大石 高志

暖 — Tさんと白鳥との交流 —

飯澤 茂雄

これは、木崎湖へ飛来した白鳥とTさんとの三シーズンに亘る交流の様子をお聞きして記したものである。この始まりは平成九年十一月、三羽の幼鳥が木崎湖へやつて来た時からだつた。湖畔に住むTさんがバン切れを与えているうちに、側へ寄つて来るようになつた。次の年はどうしたことか一羽だけが十月飛来した。ご主人が岸辺近くに小さな浮き板を並べてやると、その上で羽を休めるようになつた。この頃にはTさんの手からえさをついぱむほど慣れて来た。

三シーズン目の昨年十一月二十一日、湖心へ一羽の白鳥が舞い降りた。白鳥は湖畔に立つTさんを目掛けて真っすぐに泳いで来た。あの鳥だつた!「今年も忘れず飛んで来たのかと思うと感動し、可愛い孫がやつて来たようで、じーんと胸が熱くなりました」と話してくれた。Tさんは白鳥を「あずみ」と呼ぶことにした。この鳥がコハクチヨウであることもその後分かつた。どうしたとか「あずみ」の片目が潰れていたのだ。一人ほつちになり、いじめられたのだろうかとTさんは心配した。最初のうちは、手でえさをやつても焦点が定まらず、苦労したそうである。

この年の十二月二十七日、突然木崎湖へ三羽のオオハクチヨウが飛来したが、翌朝彼らとともに「あずみ」も居なくなり、それ以来姿を見せなくなつてしまつた。がつかりしていたTさんに私は、「帰る時にはきっとお別れに来ますよ」と冗談半分に慰めてあげたのである。

三ヵ月程が過ぎた三月二十二日、本当に「あずみ」がやつて來たのだ!長い別れの季節を感じて飛んで來たとしか思えない。そしてTさんとの絆を確かめ合つたかのように二十九日の早朝、木崎湖を後にしたそうだ。遙かな北の大地に半年以上もの時を過ごしながら、日本への渡りの季節が巡つて来ると、木崎湖畔の佇まいとともにTさんとの記憶が呼び覚まされるのだろう。渡鳥だけに不思議であり、野性との交流に温もりを感じる。

近年、自然との共生が真剣に求められているが、それには私たちもTさんのように野外でじかに自然と触れ合い、自然の美しさや神秘な営みに興味を持ち、自然を肌で学ぶことが欠かせない。また、時代が今求めているものも、子供時代に自然のなかでの遊びを通じて育まれていく豊かな感性ではないかと思う。

残された三人の「字」

—「西糸屋」を愛された岳人の絶筆・墨跡ものがたり—

奥原教永

1

はじめに

上高地の山宿であるわが家「西糸屋」に関する話題を紹介した人物三人の「字」が残っている。茨木猪之吉先生、松濤明さん、田淵行男先生である。三人ともすでに故人となられた。「字」についても、書状、絶筆、日記、墨跡と形はさまざまであるが、そこには三人それぞれの人となりを垣間見るとともに、一人一人のわが家との因い縁、特に父母との深い縁がうかがい知れて感慨ぶかい。三人のうち、田淵先生以外のお二人は、私の少年時代の方で、記憶は薄く、おぼろげな思い出しかないが、山岳界では忘れられない方々である。三人の「字」とその人それぞれにまつわるエピソードを紹介し、今は亡き三方を偲びたいと思う。

間温泉へ転居した。濁流の押し寄せる中で二階へ揚げた仏壇も、無事に浅間へと移った。三十二年九月に父が他界し、初めて仏壇の名前が書いてあり、中から二枚の古びた官製引き出しを開けると、白い包み紙に見慣れた崩し字の父の字で、東京の電話番号と相手の名前が書いていた。一枚は昭和十九年の八月と九月のものと分かり、母に聞いて、それが茨木猪之吉先生の最期の便りで、電話番号などは捜索状況の連絡先と知った。茨木先生の八月十日付けのはがきには、こ書かれている。

小生も二三日中に切符を入手して、絵の準備をして押し出す考へです。昨今訓練組（隣組での強制的な防空訓練を指す）もやかましいです。徳本峰の紅葉もソロソロならん。秋風立つ峠路を思い出す。

「……考えてみますと、茨木さんが昭和十九年十月二日、穗高岳で行方不明になられてから今年で十五年になりました。わたしと茨木さんの山旅の最後は昭和十九年八月の上高地の生活でした。西穂高から奥穂にのんびり遊んで上高地において常さんの家によつたわたしは、河童橋の上でばつかり茨木さんにつたのです。

その後、時をだいぶ経た平成九年（一九九七）、わが家を囲む常連客に興味を持った中村博男さんから「関係する資料があつた」と本のコピーを送つていただいた。昭和三四四年（一九五九）三月に朋文堂から刊行された芥木猪之吉著『山の画帖』の「あとがき」で、小野幸さんが書かれたものだ。

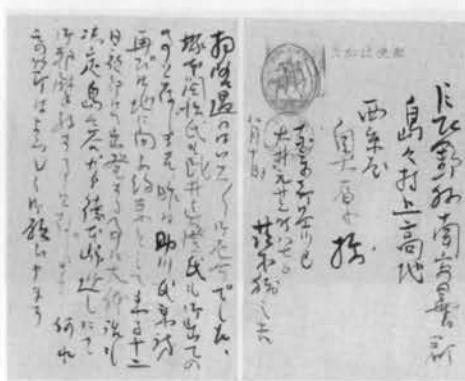
茨木猪之吉先生と一枚のはがき
自由気ままな山旅をされた茨木
が家を常宿にされていた。ところ
九年（一九四四）十月二日、奥穂

自由気ままな山旅をされた茨木先生は、なぜか父とは性が合つたらしく、上高地ではわが家を常宿にされていた。ところが、昭和一九年（一九四四）十月二日、奥穂高岳の穂高小屋で、涸沢小屋の「金正屋」こと、平林次男さんに見送られ、新雪の舞う白出谷を下がつたまま、消息を断つてしまつた。根雪のくる前に、捜索はされたが発見できず、翌二十一年初夏の頃、のちの北穂高小屋の小山義治さんによつて、ザックだけが見つけ出された。たまたま、その二十年十月、島々のわが家は、徳本峠からの谷川の鉄砲水で一階が埋没し、二十七年に松本へ移住、二十九年には浅

また九月十七日付けは、次の文面である。

四十五日雨天つづきでウンザリした。今日は久々で日光を見る。そろそろ秋晴れとなる。武井氏は出られぬらしい。

助川も兵隊の方（召集令状が来て、部隊へ入営すること）で来月上旬で落ち付かぬらしい。宮坂君は都合で行くでしやう。



昭和19年8月10日付



苦木猪之吉牛牛 絶筆

御はがき見、あれから（小野さんと上高地で別れたから）岩魚止の宿にて、ゆっくと早い昼食を食い、炉辺でのびゆくに着き、すぐ電車にて松本へ。松本の友人宅へ立ち寄り一泊。

翌朝切符を求めて夜行にて無事帰京。雑用多く今日までノビていたが、今夜行に初秋の上高地を再び訪ねます。松本の画友を誘つてのんびりと徳本の秋を賞しつつ行きます。秋にはまだ早いが晩夏、初秋のサビた感じがよからん。

人子もすくないでしょ。静かな渓谷は天下一品ならん。矢張り西糸屋に根城を置きます。早々

松本の画友とは多分、宮坂勝先生と思う。宮坂先生は昭和二十年代後半からずっと、わが家で画筆を持たれたが、わたしが知つてゐる先生は、とても徳本峠を越されると、とても想像できないお体であった。

『山の画帖』は茨木猪之吉著となつてゐるが、「あとがき」を書いた小野幸さんは、その遺稿を編集されたようである。小野さんは、わたしもお仲間に入れてもらつて明治大学山岳部のOB会「炉辺会」の特別会員である。

茨木先生の右の三枚のはがきから推測するところ、先生は九月十九日の夜行列車で新宿を出て、松本へ二十日朝に着き、徳本峠を越えて上高地へはその夕方に着いたと思われる。母から「先生は二十三日にわが家を出発した」と聞いているから、涸沢へ二十三日午後には着

いていた筈だ。

その後、十月一日まで涸沢小屋で、ナナカマドの燃えさかる赤と、岩海を埋めるハイマツの緑、そこへ、うつすらと乗つた新雪の白かし大した事もなく早く島々駅へ四時近くに着き、すぐ電車にて松本へ。松本の

二日朝、金正屋が先生の荷物を背負つて白出しのコル（鞍部）までお供をし、雪が舞い上がる飛彈側の谷を下る先生を、たしかに見送つたという。

わが家ではこの最後の写生画以外も含め、数点の作品を預かって、のちにご遺族にお返しました。世話になつた記念にと、一点だけいたいているが、父は「預かつた絵はこれだけだつた」と言つて、「もう一枚くらいもらつとけばよかつたな」と冗談で話したことがあつた。

縁あつて、平成十年の春、知人に依頼され、これらのはがきについての話をかすかに思い出ながら、雑誌にも書いたが、ここに、転載したい。

七）八月に上高地の岩盤に取り付けられたウエストン師のレリーフが戦時中は外人崇拜とみなされ、翼賛青年団や青年団の反撥をかい、金属供出の恐れがあつた。それを避け、日本山岳会本部は秘密裡にレリーフを取りはずし、東京へ持ち帰つたことがあつた。

後になつて分かつたことだが、それを実行したのは、茨木先生と「炉辺会」の交野武一さんで、十七年十二月八日、松本の石工二人と雪を踏んで現場に入り、レリーフをはずしたという（注1）。帰途、

先生たちは「常さ」の小屋で合流した上条孫人氏（注2）と留守番一人の「中の湯」で泊まつたそうだ。食事のため、投網で池の鯉を捕

日、白出沢を下つたまま消息不明である。

今、わが家にある油絵は、偶然にも白出沢

からの涸沢岳である。（平成十年六月発行、『ブルーガイド情報板・上高地・乗鞍・奥飛騨・高山』より）

茨木先生は上高地で大きい事跡を残された。

（上高地 西糸屋 山荘）

つてゐる交野さんと、それを見ている「孫さん」を描いた先生の墨絵が交野さん方で見つかった。

注1. この件については、日時、固有した人物に種々誤認があるが、「日本山岳会信義館・十五年誌」出版の折に、支那日日新聞の林後樹氏の懇意な調査、資料収集によって正確な記録を残すことができた。

注2. 菊門山の孫、或前名を継せたガイド。



茨木猪之吉先生筆「涸沢岳」 昭和8年8月、白土谷付近にて

大町と丸山彰先生

峯
村
降

に暮らしてきた。私の同級生や後輩には三年生として最後の全校登山の後、「もう山には登らない！」と宣言した者もいたが、「とにかく山で経験したこと」はそんな各人にしても精神の良き基層をなしていると確信する。

夜の対山館通いも足繁かつたという。
このような大町絶好の山人環境と教職とい
う仕事の中で、先生は著名な岳人・芸術家ら
との多くの知遇を得た。横有恒・深田久弥・
尾崎喜八・浦松佐美太郎・福岡聖行・山川勇
一郎・田淵行男・塚本閑治・船越好文・内田

はじめに
雲の湧く峰
霧流れる谷』と題する追悼集

『雲の湧く峰 霧流れる谷』と題する遺作集が、多くの有志の協力によって、間もなく丸山家から刊行されようとしている。（＊）

終戦間もない昭和三年四月八日、旧制大町中学は新制度のもとで大町南高校（現大町高）として発足した。この記念すべき年の六月三・四日に同校の体育教師だつた三〇歳の先生の発案による全校登山が始まった。北は白馬から南は燕岳まで八班に分かれ、生徒は残雪の北アルプスの頂に立つた。以降五十余年にわたつて今日まで連綿と続いている第一回開催直前の大町高校新聞（六月二日

付)に先生はこう語っている。現代表記に著者改変
「動機として私は前から大町を中心とした安曇の文化というかそうしたものが、自然なかんずく山によつて育まれ形づくられ我々の中に生きていることをを感じます。私達の心中には山が大きな誇りとして生きているのですが、目前にある時にはさほどにも感じないのです。これをもう一度新しい広い眼で山を見直したら、そこにある美しさ深さ厳しさと言つたらよいかもしれません。そのものの偉大さに驚嘆し敬服せずにいられないと思ひます。」

大町高校の生徒甲斐とし、つまらぬことをなむか山へつづりて行つて深く極めることによつて生まわる。山は必ず我々に何ものかを与えるでしよう。こうして何とか我が校が他の学校に持てない誇らかな特性を持たせたいという気持から出発しました。確かにここから出発しない限り生きた大町南高校生と言えないと思えるのです。

先生は朝例の精神で男の手立てとして大町根幹たる北アルプスを各々が自ら体感して再認識し、そこから新たな地方文化発展の力を湧き起こそうとした。また、大自然によって教えられること、癒されることの真価を言葉のみならず、全校生徒に実地に悟らせようとした。これは昨今死活的に必要性が叫ばれてゐる根本的な環境教育実践の先駆といって間違いない。

このころから大町の青年と南高生を中心とする山岳博物館創設・準備運動も盛んになる。先生も積極的に參画し昭和二六年一月一日「南高山岳館」の理想は「大町山岳博物館」として結実したのだった。

私たちちは運命的に大町や安曇に生まれ、育ち、北アルプスが存在するゆえの独特的の風土

麓に暮らす山好きの使命は、山に魅せられる。それは直接の同行案内でもあり、間接の情報提供でもあるが、人々と山で結ばれたことを喜びとし、我を押しつけず各人の山に対する姿勢を尊重し、地の利と親切とを惜しみなく提供することでであろう。それが心底でいる人を私は「山麓の正統派岳人」と呼びたい。大町の登山史をひもとく時、即座にこのようないたんとして思いあたるのは百瀬慎太郎と平林武夫である。

百瀬は明治二五年生まれ。周知の如く、大正から昭和前期に大町の旅館「対山館」主人として物心両面で登山者に親切を尽くすとともに日本初の山案内者組合を作り、針ノ木の大沢小屋・峠小屋をも建設して北ア登山の普及に努めた人である。

平林は明治三九年松川村生まれの小学校の

耕作……と枚挙に暇がない。

ここで先生を私の知る限りの大町三代目の山麓の正統派岳人と呼びたい所以は、こうして山を愛する中央の人々に大町人（地元）ならではの知識と、独自の人脈と経験と家族ぐるみの誠実をもって接し、なおかつその幸を独り占めすることなく地域文化向上のために役立てた点にある。

大町南高や昭和三年から転任した大町北高での右記著名人による講演会の企画、尾崎喜八への北高校歌作詞依頼、鹿島山荘の狩野喜一への能頌徳碑の横有恒への揮毫依頼、福岡孝行への新たなスキーめぐみ補地視察や中信高校体育連盟スキー講習会創始の協力依頼などは、永山の一角として、先生の得た「良きもの」を教育・観光・産業、そして家庭の幸福にまでも……、つまりは地域の「幸せ」へと何倍にもしてファイードバックしているのである。

おわりに
丸山先生は多くの人々の心に豊かな可能性を秘めた大樹の種を蒔かれ去つた。この種を芽生えさせること、あるいは芽生えた苗木を精一杯大きく育て次代に継ぐことが、私たち有志の使命である。

（丸山彰先生追悼集刊行会事務局）
（*）追悼集は自費・非売出版

山と博物館第45巻第6号

發行 平成二年
長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL〇二六一-二三一〇二一
FAX〇二六一-一一二一-二二二三
印 刷 大系 タイムス印刷部
定 価 年額 一、五〇〇円 送料共(切手不可)
郵便振替口座番号〇二四〇一七一三五三